

世界遺産登録に対する住民の態度

—期待不一致理論による分析—

丸山奈穂*

**Residents' Attitudes toward Inscription on the World Heritage List :
An Analysis using Expectation-disconfirmation Model in Gunma Prefecture**

Naho MARUYAMA*

要旨

本研究は、群馬県富岡市において、地域住民の世界遺産登録に関する満足度を探るものである。とくに、期待不一致モデル（Expectation-disconfirmation model）を使い、世界遺産登録前の期待と登録後の実感（知覚）の差が満足度にどのように影響を与えるかを探った。アンケート調査の結果、ほとんどの項目において、期待と知覚の差が大きく、登録前に住民が正確な情報を得ていないことが明らかになった。また、特に環境面への好影響に関する不一致が世界遺産登録に関する満足度に影響を与えることが分かった。最後に今後の研究への展望を述べる。

キーワード：富岡製糸場、世界遺産、住民、期待不一致理論

Abstract

This paper looks into local residents' satisfaction with the designation as the World Heritage List. The study focused on the gaps between their expectations prior to the designation and what they actually felt (perceived performance) after the designation and explored how the gaps influence on their satisfaction levels using the expectation disconfirmation model. The results of the survey showed significant gaps between the expectation and perception in most questions, indicating that they didn't obtain accurate information prior to the designation. The results also showed confirmation or disconfirmation of favorable environmental effects had an impact on

satisfaction with the designation as the World Heritage List. Finally, the paper suggests a picture of future studies.

Key words: Tomioka Seishi-jo (Tomioka Silk Mill), World Heritage, resident, expectation disconfirmation theory

I. はじめに

近年、国内において世界遺産に対する関心が高まっている。2013年の富士山（「信仰の対象と芸術の源泉」）文化遺産登録に始まり、2018年の長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産まで毎年続けて日本国内の遺産が世界遺産として登録され、2019年5月にも百舌鳥・古市古墳群度の登録が決まった。これらのことから、観光客のみならず、地域おこしのための起爆剤として地域住民から期待が寄せられている。

世界遺産登録は多くの場合、その地域に観光地としての価値とブランド力を付与し、観光誘客効果を高める（鈴木、2010）。例えば、2014年に世界遺産登録がなされた富岡製糸場では、登録勧告後1ヶ月の間に前年の同時期の約3倍の観光客が訪れた（富岡市、2018）。同様に、2018年に登録された長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産では、登録後の1ヶ月で構成資産の教会などを訪れる観光客が前年の同時期に比べて5割増加した（長崎新聞、2018）。

新井（2008）によると、世界遺産登録による観光客の増加は、地域経済や社会の活性化につながる可能性がある一方、地域資源のオーバーユースによる環境や景観の破壊などの問題も指摘されている。また、受け入れ体制が整わないまま観光客が急増することによって地域住民の生活に悪影響が及ぶ場合もある。

地域住民の観光地化に対する前向きな態度は、観光を持続可能なものにするために不可欠なものとしてされている（Choi and Murray, 2010）。地域住民の態度に関しては、多くの研究がなされているが、日本国内において、世界遺産を有する地域における住民の観光地化に対する態度はまだあまり研究がなされていない。そこで、本研究では、群馬県富岡市にある富岡製糸場周辺の住民に焦点をあて、彼らの観光地化に対する考えを探る。特に世界遺産登録決定から比較的日子が浅いこと（アンケート実施：2016年）を考慮し、期待不一致理論を用いて登録前の「期待」と登録後の「知覚」の差がどのように世界遺産登録への満足度に影響を与えるかを探る。研究の目的は以下の二つである。

- 1：富岡製糸場周辺の住民の観光地化に関する考えは、世界遺産登録前（期待水準）と後（知覚水準）で差があるか
- 2：期待水準と知覚水準の差（不一致）は、世界遺産登録に対する満足度に影響を与えるか。

II. 背景

II - (1). 世界遺産と観光

1972年にUNESCO総会において、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（以下、世界遺産条約）が採択された。それによると、「世界遺産」とは、過去から未来へと引き伝えていくべき人類共通の遺産とされ、世界遺産条約は「文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界の遺産として、世界遺産リスト損傷、破壊等の脅威から保護し、保存するための国際的な協力及び援助の体制を確立すること」を目的としている（外務省、2019）。

このように、世界遺産認定は観光発展のためになされるものではないが、現実的には世界遺産に認定されることによって、その資源（自然、文化、もしくは複合遺産）に対する国内外における認知度が上がり、観光地としての「箔付け」となる、もしくは「肩書」「ブランド力」の付与につながることで各地で報告されている（伊藤、2017; Rakic, 2007）。そのため、Andreone（2009）はすべての世界遺産やその周辺地域では、観光客増加によるマイナスの影響を最小限に抑え、その地域の観光産業を持続的なものにするためには戦略的な開発計画を立てる必要があると述べている。

一方で、世界遺産認定が観光客の増加に結び付かない例、もしくは短期的な影響で終わってしまう例も報告されている。例えば、Poria et al.（2011）は、世界遺産というタイトルが観光客にとって必ずしもマグネットにはならないと述べている。その理由として、世界遺産というブランドに惹かれる観光者がいる一方で、世界遺産に登録されることで人が増えたり、遺産が真正性（Authenticity）を失い、商品化されてしまうと考える人も増えることが考えられる。同様に、渡辺他（2008）が日本国内3か所の自然遺産登録地域について観光客数の変化を調べたところ、2か所（白神山地、屋久島）では集客効果が10年以上に渡って続いている一方、知床では一時的な増加だったことが明らかになった。最近では、群馬県富岡市の富岡製糸場（平成26年登録）でも、登録後は前年に比べて約4倍の1,337,720人の観光客が訪れたが、平成30年には482,788人にまで減少した（富岡市、2019）。

観光客が世界遺産を訪れる動機に関しても、いくつかの研究がなされている。例えば、伊藤（2017）は、観光客は、記号の意味が特別なものを見に行く傾向があるとし、「世界遺産である○○」を見に行くと指摘している。また、市川、羽田、松井（2016）が白川郷において、観光客対象に調査を実施したところ、個人宿泊型の日本人ツアーリストの来訪動機は「合掌造り」「世界遺産」というステレオタイプな白川郷のイメージを求めて来訪する傾向がある一方、個人日帰り型の観光客は「ついでに寄った」など偶発的な動機が多いことが明らかになった。

II - (2). 世界遺産の地域への影響と住民の考え

世界遺産登録に伴う観光客増加による地域の自然、文化、社会、政治などへの影響に関する研究

も行われている。例えば、市川（2008）は、世界遺産登録後の屋久島では、登山道やトイレが整備され、エコツアーの展開などによって、広範囲へ観光客が訪れるようになった一方、新しく観光地となった場所の自然環境への影響や、住民の生活エリアへの観光客の侵入などが新たな問題となっていると述べている。また、鈴木（2010）は、福山市では、世界遺産へのノミネーションを巡って住民間でのイデオロギー対立が起きたことを明らかにした。

地域住民の世界遺産に関する考えとして、Pham（2012）によると、ベトナム初の世界遺産であるHa Long Bay周辺住民にアンケート調査を実施したところ、多くの住民が観光客の増加は、地域の経済、文化、および社会の発展に役立つと考えていることが分かった。逆に、環境面に関してはマイナスの影響を感じていることも明らかになっている。Nicholas et al.（2009）によると、世界自然遺産がある地域の住民の観光地化に関する考えには、地域に対する愛着（Community attachment）と環境保全に対する考え（Environmental Attitudes）が影響を与えることが明らかになった。同時に、観光に関する意思決定への参加の有無は、観光地化に関する態度に影響を与えていないことも明らかになった。これは、住民参加レベルの低さが原因だろうとNicholas et al.（2009）は分析している。逆に、Jaafar et al.（2015）がマレーシアの世界遺産であるLenggong Valleyで行った調査によると、特に若い住民の間では、観光に関する意思決定への参加の有無が観光開発の支持と強く結びついていることが分かっている。これは、意思決定への参加は、「地域への帰属意識」と「観光開発への支持」の間を結ぶもの（Mediating variable）として機能しているからだと考えられる。Landorf（2009）は、世界遺産がある地域の観光地化を持続可能なものにするためには、複数のステークホルダーの参加を促し、住民のエンパワーメントを促すことが不可欠であると述べている。ただ、「地域社会」とは決して均質的ではなく、むしろ社会的及び経済的に様々なステータスにある住民が集まっていることが多く、その差が「住民参加」を妨げていると指摘している。

II - (3). 地元住民の態度と期待不一致理論

過去の研究によると、地域住民の観光に対する好意的な態度は、地域の観光を持続可能なものにするために必要不可欠なものだとされている（Ap, 1992; Choi and Murray, 2010）。そのため、近年の研究では、社会的交換理論（Social Exchange theory）（Ap, 1992）や社会的表象理論（Moscardo, 2011）などを用いて、住民の態度に影響を与える要素を探ることに焦点をあてた研究が多く見られる。例えば、社会的交換理論では、地域の人々は、観光から得る利点（収入増などの経済的利益、地域の発展など社会的な利益、プライドの増加など精神的な利益等）とマイナス点（観光客増加による騒音、生活圏の侵害、物価の上昇等）を比較し、利点のほうが多いと判断すれば観光地化を支持し、マイナス点が多いと判断すれば観光地化に反対すると説明されている。実際に、多くのケースで観光業に従事する人は、観光地化による経済的利益を直接的に享受することができるため、観光地化を支持するという結果が出ている。さらに、最近の研究では、

経済的利益を受けていない人も精神的利益を受けていれば観光地化を支持することが分かっている (Maruyama et al., 2016) しかし、期待不一致理論 (Expectation-disconfirmation theory) を用いた研究はなされていない。

期待不一致理論とは、消費者の商品への満足度は相対的なものであり、購入前の商品への期待に対する実際の商品の性能で評価される、とする理論である (Yuksel and Yuksel 2001)。人はモノやサービスを購入するとき、事前にそれらに対して期待する (「期待水準」)。そして、実際にそれらを購入したあと、商品 (サービス) を使った結果 (「知覚水準」) を事前の期待と比べる。この期待水準と知覚水準の差が「不一致」 (Disconfirmation) とよばれ、消費者の満足度に影響を与えると考えられている。もし、実際にうけたサービス (もしくは購入した商品) の質が事前の期待より良ければ、前向きな不一致 (Positive disconfirmation) が起こり購入者は満足をするが、期待を下回ればマイナスな不一致 (Negative disconfirmation) が起こり購入者は不満を感じる。この理論は、これまで観光研究において観光者の満足に関する研究に用いられている。例えば、長谷川 (2010) は北海道を訪れた観光客を対象に、食べ物に対する期待と実際の評価との不一致を調査し、それがどのように食事全体の満足度に効果を与えるかを調査した。その結果、食べ物によって (例: カニ、すし、ラーメンなど)、不一致が与える影響が違うことが明らかになっている。また才原 (2016) は旅館やホテル、飲食店などの観光施設のサービスに対する期待と満足度、再来訪意向について言及している。

しかし、この理論は、住民の観光地化に対する態度の形成にはまだほとんど用いられていない。同類の研究として、Sirakaya et al. (2002) によると、地元住民は観光地化が始まる直前または始まった直後には観光地化がもたらすと考えられる利益に対して、時に高い期待を抱き協力的な態度を示すが、観光地化が進むにつれて、ネガティブな態度に変化することが明らかになっている。この結果に関しては様々な原因が考えられる。例えば、観光地化が進むことによって、地元資本ではなく外部資本のホテルなどが増えて地元への経済的還元が減ることや、観光客が増えるに連れて、地元の文化を知りたいと思う観光客より、単に「楽しみたい」と考える観光客が増えることなどが理由として考えられる (Butler, 1980)。しかし、このように地元住民の態度の変化が、事前の期待水準と実際の満足度の不一致によるものかどうかは、研究がなされていない。

持続可能な観光開発において、地域住民は重要なステークホルダーであり、住民の満足度と観光地としての成功は直接結び付くと考えられている (Choi and Murray, 2010)。特に、世界遺産登録など、観光客数や知名度が急増する出来事があれば、住民は事前の様々な情報や変化に基づいて、観光地化がもたらす影響に対して期待を形成する。そして、その期待と知覚の一致もしくは不一致が、観光地化や世界遺産登録に対する満足度に影響することが考えられる。

Ⅲ. 研究方法

群馬県富岡市にある富岡製糸場は1872年に日本初の本格的な器械製糸場として、また官営模範工場として創業した（富岡製糸場、2015）。1893年に民営化してからは幾度かの経営母体や名称変更を経ながら、1987年まで一貫して製糸工場として操業を続けた。閉業後も、片倉工業株式会社によってほとんどの建物が保存された。その富岡製糸場は、2014年6月21日に「富岡製糸場と絹産業遺産群」の名称のもと、田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴との4資産とともに、国内で18番目の世界遺産として登録が決定した。現在、富岡製糸場は富岡市が管理しており、主に外観が一般に公開されている。

世界文化遺産の登録にあたっては6つの評価基準のうち、ひとつ以上満たせば、登録基準を満たす（群馬県2017）。富岡製糸場の場合は評価基準(ii)「科学技術の発展に重要な影響を与えた、もしくはある期間にわたる価値観の交流を示した遺産」および基準(iv)「歴史上の重要な段階を物語る建造物または科学技術の集合体」の二つの基準に当てはまる。富岡市の説明によれば、評価基準(ii)に関しては「高品質生糸の大量生産をめぐる日本と世界の相互交流」の価値が確認された。特に政府主導による高品質生糸の大量生産を可能にした近代技術の導入、日本国内での養蚕および製糸技術の改良および促進、日本の高度は養蚕および製糸技術の交流による世界の絹産業の発展、の3点が高評価を受けている。また、評価基準(iv)に関しては、「自動繰糸機での製糸技術の発達」および「革新的な養蚕技術の開発とその普及を伝える建築物・工作物の代表例」として、世界の絹産業の発展に果たした技術的な役割とその主要舞台であったことが認められた（富岡市、2018）。

本研究は、2016年11月～12月に実施された。富岡製糸場周辺の住民を対象にアンケート調査を実施した。サンプリングには多段集落抽出法を適用した。富岡製糸場周辺（半径約3キロ）を20のエリアに分け、各エリアの中でランダムに選んだ地点から1軒おきに個別訪問をした。アンケート参加に賛成の住民にはアンケート用紙を渡し、同日午後回収した。もし訪問宅が留守の場合は、隣家を訪問した。トータルで608枚のアンケート調査を回収した。

住民の期待水準および知覚水準を計るのにKo and Steward (2002) のTourism Positive/Negative Impacts Scaleから23アイテムを適用した。この23アイテムは、観光による経済への好影響（6アイテム）、文化社会への好影響（3アイテム）、環境への好影響（3アイテム）、経済への悪影響（4アイテム）、文化社会への悪影響（4アイテム）、環境への悪影響（3アイテム）の6因子を含む。

また、世界遺産登録に対する満足度を計るためにNicholas et al. (2009) による世界遺産へのサポートを計る尺度から1アイテムを適用した。これに加えて、事前の観光業への期待の形成するためには、プランニングへの参加および個人属性などが影響を与えることが考えられるため、これらに関する質問が加えられた。

アンケートは5ポイントのリカート法を使用し、回答者には、1＝全く当てはまらない、から5＝非常に当てはまる、から1つ選んでもらった。

IV. 分析結果

アンケート調査の回答者の属性および富岡市での居住状況は表1および表2のとおりである。基本属性では、男性は47.4%（277名）、女性は52.3%（306名）である。平均年齢は61.2歳であり、特に43歳から54歳の中年層のグループが最も多く22.7%（130名）を占めている。学歴では、おおよそ半分の回答者が高校卒業となっている。また収入面をみると、平均収入が2,000,001円～4,000,000円のグループが最も多く全体の約3分の1となった。

富岡市での居住状況として、回答者の半数以上（57.3%）が富岡市出身である。そのうち、約84%が16年以上在住であった。また、日常生活のなかで観光客と交流する頻度としては、半数を超える回答者（61.3%）が「全く交流がない」という回答であり、次に多い回答が「年に1～2回」で22.0%であった。逆に、日常的に交流がある（週3回以上）回答者は、17名（2.8%）に留まった。

表1：回答者の属性

記述統計	n	%
属性		
性別 (n=585)		
男性	277	47.4
女性	306	52.3
年齢 (n=572、M=61.2歳)		
19-30	21	3.7
31-42	70	12.2
43-54	130	22.7
55-66	96	16.8
67歳以上	255	44.6
最終学歴 (n=584)		
中学卒業	51	8.7
高校卒業	268	45.9
専門学校、高専卒業	72	12.3
短大	62	10.6
4年生大学卒業	121	20.7
大学院等	10	1.7
婚姻状況 (n=586)		
未婚	55	9.4
既婚	471	80.4
離婚、死別	60	10.2
収入 (n=517、Median= ¥2,000,001～¥4,000,000)		
¥2,000,000以下	104	17.1
¥2,000,001～¥4,000,000	187	30.8
¥4,000,001～¥6,000,000	116	19.1
¥6,000,001～¥8,000,000	63	10.4
¥8,000,000以上	46	7.6

表2：回答者の居住環境

居住環境	n	%
出身地 (n=592, Median=富岡市)		
富岡市	340	57.3
富岡市以外の群馬県内	174	29.3
群馬県以外	74	13.0
その他	2	0.3
富岡在住年数 (n=585, M=42.7年)		
1-15年	94	16.1
16-30年	83	14.2
30-45年	140	23.9
46-60年	124	21.2
61-75年	108	18.5
75年以上	36	6.2
観光客と交流する頻度 (n=598, Median=全く交流がない)		
全く交流がない	373	61.3
年に1~2回	134	22.0
月に1~2回	51	8.4
週に1~2回	23	3.8
週に3回以上	17	2.8

表3：期待水準、知覚時水準の有意確立

Impacts Item	Expectation Mean	Perception Mean	Mean difference	t	Sig. (2-tailed)
経済への好影響	3.1305	2.6676	-.46296	-11.948	.000
町の経済が発展する	3.49	3.26			
雇用が増える	3.24	2.87			
生活水準が向上する	2.85	2.29			
町の税収が改善される	3.18	2.59			
生活の質が向上する	2.81	2.32			
娯楽施設が増える	3.13	2.69			
文化社会への好影響	3.4676	3.2477	-.21991	-5.135	.000
歴史・文化的な展示への需要が高まる	3.74	3.48			
各種文化活動が促進される	3.51	3.40			
地域の防犯や防災の質が向上する	3.13	2.84			
環境への好影響	3.3333	3.0106	-.32277	-9.289	.000
地域の景観が良くなる	3.53	3.29			
生活インフラが改善される	3.02	2.59			
公共施設が改善される	3.48	3.14			
経済への悪影響	3.1974	3.1634	-.03401	-1.281	.201
町の少数の人々にしかメリットがない	3.68	3.87			
生活費が高くなる	2.96	2.93			
不動産価格や固定資産税が不当に高くなる	3.10	2.92			
商品やサービスの価格が高くなる	3.06	2.92			
文化社会への悪影響	3.3568	3.1699	-.18683	-5.748	.000
町が混雑する	3.83	3.88			
地域住民の駐車スペースが限られる	3.18	3.12			
交通事故が増える	3.32	2.92			
犯罪が増える	3.09	2.75			
環境への悪影響	2.8581	2.6251	-.23299	-8.907	.000
自然環境や景観が損なわれる	2.89	2.67			
地域の生態系が破壊される	2.80	2.60			
環境汚染が進む	2.90	2.62			

表4：重回帰分析

独立変数 不一致	Stepwise Model			
	Beta	t	p	I or E
環境への好影響	.167	3.444	.000	I
文化社会への好影響	.079	1.740	.082	E

住民の期待水準と知覚水準を比較するため、それぞれの項目および因子に対して t 検定の両側検定を行った（表3）。好影響に関しては3つの因子すべてにおいて登録前の期待のほうが有意に高く（有意水準1%）で、悪影響に関しては3因子中、経済的影響を除く2因子に関して登録前の期待（予測）のほうが有意に高かった（有意水準1%）。

次に、期待水準と知覚水準の差（不一致）と世界遺産登録に対する満足度との相関関係を探った。Person相関係数によると、環境への好影響（相関係数.148）および社会文化への好影響（相関係数.129）との間に相関関係が認められた。そのため、環境への好影響および社会文化への好影響を独立変数とし、世界遺産登録に対する満足度を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。その結果、環境への好影響（ $R^2=.028$, $Sig=.000$ ）が含まれ、社会文化への好影響が排除された（表4）。

V. 考察

本研究の目的は、期待不一致モデルを観光地の住民に適用し、世界遺産登録前の期待（予想）と登録後の知覚の差が世界遺産登録の満足度に影響するかを探ることであった。分析の結果、富岡製糸場周辺の住民は、製糸場の世界遺産登録前の経済的な悪影響に関する期待（予想）を除くすべての因子に対して、期待（予想）より知覚のスコアが低かった。これは、遺産登録による好影響に関しては期待以下だった、ということであり、悪影響に関する予想に関しては、考えていたほど悪くはなかったということである。この結果は、観光地の住民は観光地化の前には非現実的な期待をする場合があるとする先行研究結果（Sirakaya et al., 2002）と一致する。この結果から、住民は、世界遺産登録前にその影響に関して正確な情報が伝えられていなかったということがいえよう。観光地化を持続可能なものにするためには、住民の参加やエンパワーメントが必要不可欠であるが、そのためにはまず住民が観光地化に関して幅広い知識と正確な情報へのアクセスが必要だと考えられている（Sirakaya et al., 2002）。このことから、富岡市でも今後の観光地化に関して、住民への情報の周知が課題であるといえよう。

また、期待と知覚の差である「不一致」と世界遺産登録に対する満足度の関係は、環境に関する好影響のみが有意な結果であった。これは、地域の景観が良くなる、生活インフラや公共施設が良くなる、ということに関して、期待していたよりかなり良くなったと感じた住民は、世界遺産登録に関して満足しているということである。この理由として、富岡製糸場が世界遺産暫定リスト入りした2007年頃より道路整備や街並み景観形成事業が順次進められていることが考えら

れる（富岡市、2018）。富岡市まちづくり計画に基づき、富岡駅周辺地域の建物の色や高さに規制を設け、空き店舗をコミュニティ施設として整備する事業をすすめてきた。また2016年には市役所新庁舎の建設が始まり、2018年に完成した。これらの変化は、富岡製糸場の価値を最大限に引き出し、「世界遺産登録にふさわしい町」をつくることを基軸にしている。そのため、これらの項目で、思っていたより良かったと知覚した人は、その恩恵が富岡製糸場の世界遺産登録によるものだと認知し易かったといえよう。その他の項目、特に経済への影響に関しては、期待水準と知覚水準の差が最も開いているが、世界遺産登録に関する満足度とは直接の関係は見られなかった。これは、文化社会や環境に関する悪影響に関する不一致（「思ったより悪くなかった」）を含む全体的な評価が媒介となっている可能性がある（Gursoy et al., 2002）。

VI. 本研究の限界と今後の展望

本研究では、世界遺産登録前の期待を振り返ってもらってレトロスペクティブな方法で調査をした。そのため、実際に登録前と登録後に調査した場合とは違う結果になっている可能性がある。また、今後は媒介分析などを通して、世界遺産登録に関する満足度また観光事業全般に関する満足度とその理由を探っていく必要がある。また、富岡製糸場に関連する観光施設（お土産物屋、飲食店など）は駅周辺と駅およびツアーバスの駐車場から富岡製糸場までの道沿いに集中しており、少し離れると住宅地になり観光客をほとんど見かけない。観光客が多く訪れる場所とそうでない場所に住む住民の間に考えの違いが存在する可能性があり、その点についても探る必要がある。

（まるやま なほ・高崎経済大学地域政策学部准教授）

【参考文献】

- Andreone, F. (2009) . Selection, categorization, size, and zoning in the world's protected areas. *Biodiversity Conservation and Habitat Management-Volume I*, 1, 93.
- Ap, J. (1992) . Residents' perceptions on tourism impacts. *Annals of Tourism Research*, 19 (4) , 665-690. doi: [http://dx.doi.org/10.1016/0160-7383\(92\)90060-3](http://dx.doi.org/10.1016/0160-7383(92)90060-3)
- Butler, R. W. (1980) . The concept of a tourist area cycle of evolution: implications for management of resources. *The Canadian Geographer/Le Géographe canadien*, 24 (1) , 5-12.
- Choi, H. C., & Murray, I. (2010) . Resident attitudes toward sustainable community tourism. *Journal of sustainable tourism*, 18 (4) , 575-594.
- Gursoy, D., Jurowski, C., & Uysal, M. (2002) . Resident attitudes: A Structural Modeling Approach. *Annals of Tourism Research*, 29 (1) , 79-105.
- Jaafar, M., Rashid, M. M., Dahalan, N., & Zulkefli, N. S. (2016) . Characteristics of Micro and Small Businesses in the World Archaeological Heritage Site of Lenggong Valley. *Research journal of fisheries and hydrobiology*, 11 (3) , 144-152.
- Ko, D. W., & Stewart, W. P. (2002) . A structural equation model of residents' attitudes for tourism development. *Tourism Management*, 23 (5) , 521-530.
- Landorf, C. (2009) . Managing for sustainable tourism: a review of six cultural World Heritage Sites. *Journal of Sustainable Tourism*, 17 (1) , 53-70.
- Maruyama, U. N., Woosnam, K. M., & Boley, B. B. (2016) . Residents' attitudes toward ethnic neighborhood tourism (ENT) :

世界遺産登録に対する住民の態度

- perspectives of ethnicity and empowerment. *Tourism Geographies*, 1-22.
- Moscardo, G. (2011) . Exploring social representations of tourism planning: Issues for governance. *Journal of sustainable tourism*, 19 (4-5) , 423-436.
- Pham, L. (2012) . Tourism impacts and support for tourism development in Ha Long Bay, Vietnam: An examination of residents' perceptions.
- Poria, Y., Reichel, A., & Biran, A. (2006) . Heritage site management: Motivations and expectations. *Annals of tourism research*, 33 (1) , 162-178.
- Rakic, T. (2007) . World Heritage: issues and debates. *Turizam: međunarodni znanstveno-stručni časopis*, 55 (2) , 209-219.
- Sirakaya, E., Teye, V., & Sönmez, S. (2002) . Understanding residents' support for tourism development in the central region of Ghana. *Journal of Travel Research*, 41 (1) , 57-67.
- Yüksel, A., & Yüksel, F. (2001) . The expectancy-disconfirmation paradigm: a critique. *Journal of Hospitality & Tourism Research*, 25 (2) , 107-131.
- 伊藤弘. (2017) . 「世界遺産観光」の在り方. *世界遺産学研究* (3) , 1-7.
- 外務省 (2019) . 世界遺産 Retrieved 5月30日, 2019, from <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/unesco/isan/world/index.html>
- 群馬県 (2017) . 世界遺産一覧表への記載決定について Retrieved 5月30日, 2019, from <https://www.pref.gunma.jp/07/b4600001.html>
- 市川康夫, 羽田司, & 松井圭介. (2016) . 日本人・外国人ツーリストの観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光. *人文地理学研究*, 36, 11-28.
- 市川聡 (2008) . 世界遺産登録後の屋久島の課題とエコツーリズムの現状. *地球環境*, 13, 61-70.
- 新井直樹 (2008) . 世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察. *地域政策研究*, 11 (2) , 39-55.
- 西尾敏和, 塚田伸也, 森田哲夫, & 湯沢昭. (2014) . 富岡製糸場の産業遺産的価値評価と観光まちづくりに関する検討. *日本建築学会計画系論文集*, 79 (705) , 2507-2516.
- 長崎新聞 (2018年8月31日) <https://www.nagasaki-np.co.jp/>
- 長谷川光 (2010) . 観光客の期待と満足度. *消費者行動研究*, 16 (2) , 2_75-72_88.
- 渡辺梯二, 海津ゆりえ, 可知直毅, 寺崎竜雄, 野口健, & 吉田正人. (2008) . 観光の視点からみた世界自然遺産: 地球環境.
- 富岡市 (2018) <http://www.city.tomioka.lg.jp/www/>
- 富岡製糸工場 (2015) <http://www.tomioka-silk.jp/tomioka-silk-mill/>
- 鈴木晃志郎. (2010) . ポリティクスとしての世界遺産. *観光科学研究*, 3, 57-69.